

忘れられない東海豪雨から十年。大都市がともに襲われ、住民が受けた衝撃も被害も甚大でした。水害対策のもろさは解消したのでしょうか。

二〇〇九年九月十一日夕、建設省中部地方建設局(現・国土交通省中部地方整備局)の門松武・企画部長は、名古屋市南部の共同溝建設現場からの帰り激しくなる雨を見て、「今夜は帰宅せず外で夕食をとり、役所で待機した方がいいな」とつぶやいた。

一方、神田真秋・愛知県知事は翌日の出張を理由に、同県一宮市の自宅に帰ってしまった。結果は門松さんの心配通りでした。

縦割り行政のつけど

十二日までの総雨量五六七ミリ、最大時間雨量九七ミリと名古屋地方気象台の観測史上初の記録です。名古屋市区で新川左岸が約百尺決壊のほか新川と支流計二カ所

2010・9・12

社説

小規模決壊、庄内川と天白川の計三カ所越水が起きました。

東海豪雨と呼ぶこの水害は、愛知、岐阜、三重、静岡、長野県に広がり、死者は十人。岐阜県ではとくに恵南豪雨といい、矢作川流域の被害もひどいものでした。

しかし五県の床上浸水二万八千六百六十戸の六割弱が、名古屋市と隣接の都市域に集中しました。文字通り「都市水害」です。

決壊で同市区などに大被害を招いた新川は、庄内川の分水路として庄内川右岸に並行し開削され、江戸中期の一七八四(天明四)年、庄内川越流水を落とす洗堰を築きました。庄内川左岸の名古屋城下を守るためです。

東海豪雨10年

被災住民が国と県に賠償を求めた東海豪雨新川訴訟では、洗堰設置と決壊の関係が争点の一つでしたが、水害の背景に土地利用の変化も大きいと考えられます。

新川流域は昭和二十年代まで、山林と農地が圧倒的でした。しかし東海豪雨当時、四一六割が市街地になりました。それを後押ししたのは、一九七〇年に始まる市街化区域指定です。

東海豪雨当時、名古屋市と周辺は洪水ハザードマップすらありません。しかし大量の水が洗堰を越

都市水害の怖さ忘れず

週のはじめに考える

雨水が市街にあふれる

東海豪雨では、川へ流入しない雨水も市街地にあふれました。水位上昇が早く、名古屋市天白区長

流すれば、新川流域の危険は十分予想されました。それを市街化区域に指定し、住民に情報を提供せず、宅地開発など放置したのは無責任といわざるを得ません。

都市計画と防災が別々の、縦割り行政のつげが回ってきたといえます。新川の洗堰は災害復旧事業でかさ上げされ、越流水量は減り

あふれる「内水」の氾濫です。下水管を大口径にしたり、ポンプを増やし排水能力を高めればよいが、受ける方の川が危険水位を越えてはなりません。下水道と河川整備の一体化が必要です。

名古屋市は東海豪雨の前、若宮大通地下に大規模な雨水貯留施設を造りました。豪雨後も、既設の排水ポンプの能力増強、小田井雨水調整池など雨水貯留施設新設



しかし、ハードの防

災害対策は限界がありません。そこで住民への情報提供、緊急時の適切な避難支援などが不可欠です。国、県管理の河川とも洪水ハザードマップを作成・公表する市町村が増えました。名古屋は庄内川、新川、天白川の洪水に加え、内水ハザードマップを今年六月、公表しました。十年前を思つと面目一新といえます。

治にいて乱を忘れず

高齢者利用施設、地下街などへの災害情報の伝達、排水ポンプ車など災害対策機械の派遣体制も、東海豪雨当時比べ改善されました。一層の充実を望みます。

都市を襲った東海豪雨が提起した問題は、十年後の今も未解決のもの、都市化が進めば近い将来別の地域で起こりうるものが含まれています。内水の氾濫をとつてもいまだ決め手となる対策はなく、今後も頻発します。「治にいて乱を忘れず」の心構えが必要です。